



第19号  
平成七年  
(1995)  
4月15日発行  
(年4回発行)

宗匠

東明雅

昔は俳諧の宗匠となるには、才能とともに非常な努力が必要であった。たとえば、井原西鶴などは、十五歳で俳諧に志し、二十一歳で早くも宗匠になったというから、この間五六年、異常な早さと言わねばならない。これはあとで一日一夜に二万三千五百句の独吟をやったのけたことによっても分る、天才的な彼の才能によるものだろう。

松尾芭蕉は十九歳の時の発句が残っているが、俳諧に専念するようになったのは、主君没後の二十三歳頃からである。二十九歳の時句合せ「貝おほひ」を編して、江戸に下り、苦勞の挙句、三十五・六歳のころ、漸く宗匠立机を果すことができた。

小林一茶にいたっては、二十五歳のころ、溝口素丸・二六庵竹阿の下で俳諧の道に入り、

二十八歳で竹阿の死に遭い、その後四国・西国を俳諧修行して放浪し、三十七歳の時はじめて、師の号をつぎ二六庵の公称を許されたようである。このように近世期においては、一人前の俳諧宗匠となるには、よほどの才能か、よほどの努力と苦勞が必要であった。

また、そのころ宗匠立机するには、同門の先輩・古老をはじめ、支持者の出席を求めて、万句の興行をして披露するならわしであった。西鶴の場合は、有名な生玉万句がそれである。うし、芭蕉の場合も立机披露の万句が興行されたらしいことは、その作品に残っていないものの、いろいろ傍証があるので否定できない。

それにくらべて一茶の場合は、そのあたりがどうもあやふやで、特別な披露の行事は行わなかったようである。もともと二六庵の名は竹阿が没したあと、一茶が勝手に使っていたのを、十年経って葛飾派の方で黙許したというのが実情のようである。師友・先輩・同輩を多く招いて万句興行をするような多額の経費をまかなう経済的余裕は彼にはなかったとみるのが至当であろう。彼はその後、二・三年で、この称号を放棄し、次第に葛飾派を離れ、夏目成美グループの一員となるのもこのような事由によるのではないだろうか。

かくて、昔の俳諧師にとっては、立机するということとは、今日、たとえば相撲取りが大関になる程とは言わぬまでも、とも角、入幕す

る位の難しさに匹敵するものではなかったろうか。それだけに当時の宗匠には権威があり、あこがれの的だったのである。

この風潮は明治に入ってからまでも続いたが、やがて正岡子規の俳諧革新、そして日本派が勢を増してくるに反比例して、宗匠は権威を失墜し、ついで俳諧(連句)も文壇から姿を消すようになった。私が先師根津芦丈先生から連句を教わったのは昭和三十六年である。そのころ、俳句は花盛りであったが、一たび連句という語を口にすると、俳人たちはみな眉をひそめ、あたかも不浄の者にでも逢ったような表情をしたものである。

然し、幸いに俳諧(連句)は、昭和四十五年ごろから再認識され、復活して今日に到っているが、俳諧師・宗匠という言葉はなかなか戻って来ない。これは幕末ごろ、諸国を行脚して俳諧を修行した、いわゆる雲水の中に悪質・破廉恥なものがいて、俳諧師全体のイメージ・ダウンに繋がったのと、宗匠については、「俳諧大要」などにおける子規の痛烈な批判が、今も尚、世人の耳にこびりついてゐるからだろう。

私は松島の月にあこがれ、吉野の花に心を悩ませた先人のあとを追ひ、ひたすらこの道の復活に努力して来た。その私の教室に研鑽すること十余年、俳諧の精神を会得し、伝統を身につけた方をこの際新しい宗匠に指名して、この細道の同行者にしたいと思う。

一九九五年の春

前田 圭衛子

夕暮れ、公園の桜に誘われて散歩に出た。戦前からの公園で木々の中に見事な枝ぶりの桜が数十本、ソメイヨシノ、紅枝垂桜、おおしまさくらと混じり合っている。満開近くになるとそれは息をのむ美しさである・・・。

一月十七日朝五時四十六分、震度七。闇の中でベッドに叩きつけられ、そして形容しがたい凄しい揺れ、とにかく玄関まで行こうとしたが前方を遮る大きな家具の山と本箱の山、無我夢中でそれらを乗り越え外に飛びでた頃、やっと揺れはおさまった。妙に静かだった。

一・一七の無音アーチのように煮え

この瞬間から阪神地区三百万人の人生が変わった。命だけでもあったのが幸いと、そう考える事にした。自宅のひどい損壊も気にならなかつたし、ライフラインのストップにも耐え続けた。渴きのために二日間地の湧き水を口にし、生活用水は川から汲み上げた。三日後、一キロ離れた学校に新潟の給水車が来てくれ、二週間後には公園に米軍の給水車が来るようになった。この時死者は五千二百人。

「水ナイカ」波止場かたむき風花

芦屋から神戸の交通分断。代替バス、船と、

平時には想像できない路線が東西をつなぐ。

私の住む甲子園の浜から神戸メリケン波止場まで臨時の船が出るようになった。自衛隊と米軍の駐屯地のそばから船が出る。海上から眺めた三宮ポートアイランドは茶褐色に染まり、波止場は無惨な瓦礫であった。

官有無番地 私の手袋燃えだした

長田区は全て焼野原であった。市内のビルはまるでコンクリートの屑のようだった。ほとんどの人達は防災リュック（落下物よけの毛糸の帽子、中綿入りのジャンパー、リュックサック、丈夫な平靴）に身を固めていた。私は大阪への所用の折バックにはシャンプー剤とタオルと石鹸を忍ばせ、見つけた銭湯に飛びこむ事にした。「頑張ってや！」と見知らぬ人から声援を受けた。死者は五千五百人。

死んだから鴉鴉鴉きらめき

蛇口から水がほとぼしり、ガスの青い炎が戻った。ありがとう。みんなありがとう。

どんな冬だったのか全く覚えていないのに、春になっていた。公園の桜もいつもと同じように綻びはじめ、その中に仮設住宅が二十軒完成していた・・・。（れぎおん編集長）

阪神大震災

須田 智恵

阪神大震災から三ヶ月近くがたった。電気、水道、ガスとほぼ直り、倒壊家屋の撤去等で街は復興へ徐々に向かっているようである。たまたま次女が西宮市の夙川いしかわに住んでいるが、幸い皆無事で、一ヶ月余水が出る迄在東京の上帰っていった。天災とは運以外の何ものでもない事を痛感した。助かった人は皆偶然の重なりで助かったのである。それと関西気質というのか、あの凄しい地震の後の給水車の水を貰う場合も他の物の配布でも、皆大変節度を保っていたようで吃驚した。夫々の境遇で夫々の苦勞をしても、元に近い生活に戻れた人達は幸せである。飽食の時代への警告とか、政治の貧困、途轍もない円高、サリン事件、オウム真理教、警察長官狙撃、都知事選、後をたたぬ事々の明けくれに成す術もない様な感じすらする。桜ばかりが騒がしい世をよそに咲き誇っている。夙川沿いの桜も常の如く被災者の目を楽しませているとか、通行禁止の橋が天災のなごりであるという。自然は冬があれば春が来る。この地震が冬から春へ向いていたのをせめてもと思う。さくらはやはり慰めの色だと思う。亡くなった方々の魂の寧らぎと、残された御家族、被災された方々の再起を心よりお祈り申し上げる。

吾輩はマリ、当年とって二十歳

秋元 正江

吾輩は不忍池で拾われた。

全身グレイで、医者も雌と間違う程の美しさだった。それでマリと名づけたと主は言う。外国製の猫用ミルクをスポイトで与えられ、排泄も、湯で温めたカット綿を下腹部にあててもらい、やっとじわっと尿が出るのだった。ある日、雄一匹ではかわいそうだと、主は

雌（名はカオリ）を手に入れ、連れ帰った。

対面は劇的だった。カオリを見ると吾輩は図らずも前脚で顔を隠してしまったのだ。かくしてわれら二匹の生活が始まったが、食事は必ずカオリに先に取らせ、吾輩はその様子を眺めているのが楽しくさえあった。主はおもしろがってか、吾輩の方を先にさせようとカオリを閉め出してしまふことが間々あったが、そんな主の行動も恨めしく思われた。

カオリは何ととっても両親共に血統書付きのヒマラヤン種で、自分の美貌をよく知っていた。谷崎のお琴と佐助のごとく吾輩はカオリに仕えたが、それとて厭々だったわけではなく、カオリもまたそれを当然として受けていた。

一昨年の暮、カオリは天に召された。

二十韻「吾輩はマリ」

不忍池の大樹のもとに昼寝かな

蓮の花に煮干ちらばる

獣医さん雄と雌とをまちがへて

スポイトつかへ叩くやや寒

物干しの月影を踏み駆けめぐる

湯島同朋町天蓼の熟れ

旧三業地下駄屋に床屋置屋待合

野暮用ひとつ数へ日にゆく

鳥総松稲穂の簪揺らぎるて

お琴と佐助を猫がそのまま

カオリこそ誇りも高きヒマラヤン

箱屋の兄さん帯をきうっと

江戸っ子と東京っ子とはちと違ふ

垣根をのぼる尺取の月

高齢のつれあひ二十歳意気盛ん

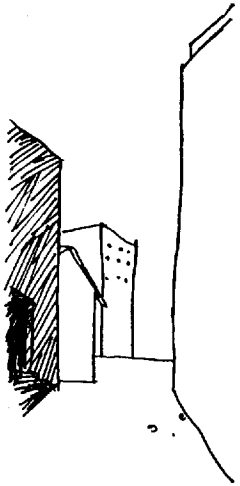
仏頭の鼻しみじみと撫づ

パキスタン猫も人間もみな瘦せて

乳母車行く囁りの坂

あるじ今年の花見に出たつきり

おぼろとなりしバツハシャコンヌ



十六歳

権頭 和弥

「近所のヒトじゃないナ、どうも顔かたちからして、うちの婆さんに関わりのある者らしい」。小太郎は、戸傍口に腰を据え、このヒトの様子を窺った。「留守居番お願いネ」と言って、婆さんは家の下のお寺さんへご詠歌のおさらいに出かけ、まだ戻っていない。「婆さんを迎えに行かなきゃならんかナ」。小太郎は、坪庭から土蔵の裏手へ回り、小溝の流れに沿ってお寺への直ぐ路を下っていった。庫裡の玄関で、小太郎は二三度婆さんと呼んだ。梵妻さんとうちの婆さん二人が、ここにこしながら出て来たのを見計らうと、小太郎は家へ素っ飛び帰り、縁側に腰かけているヒトの足許に擦り寄った。「来ますよ、直に」。間もなく、うちの婆さん、手を振りながら坂道を登ってくるのが見えた。「どなたかと思ったらお前さんか」婆さんは、久しぶりに会う甥っ子を家の中に招き入れた。「でも、よくわかったネ」。そう、小太郎のお迎えがあったのヨ。「へえっ、この猫が」。用事のあるヒトは、見抜くみたいネ。婆さんは太ちよの三毛猫、子太郎の首を撫でながらそう言った。「猫世界では十六歳、ヒトの齢で言えば、うちの婆さんと同イ年八十五歳ですヨ」。子太郎は喉を鳴らし婆さんの傍らで、婆さんの甥っ子であるヒトを薄目で見遣った。

A・C・Cの講座に「連句入門」というのがあるというのを聞いて早速申し込んだが、定員に空きがないということで二度断られた。一年前偶然参加出来て大変嬉しかった。連句には全く予備知識がないが、入門とあるから古今の名作の評釈鑑賞が主であろうと考えていた。しかし講義にはいきなり実作があり、これには驚愕すると共に当惑してしまった。

受講生のみなさんはもう何年もの熟練者ばかり、その中にひとり加わるのは針の筵に坐っている気持ちである。成程連句というものの享受の仕方は他の文芸作品と全く違って、一座に参加しその制作過程に直接関与しなければならぬということとは物の本で読んだように思ったが、観念的にはなく、現実に自分がその場に置かれると大変なことである。そこで一番気になるのは、一人の未熟者の参加によって一座の構成が揺らぎ、作品に瑕瑾が生ずる虞があるということである。俳句の句会なら一隅にいて鳴かず飛ばさずすむが、座の文学としては連衆の一人を黙殺し得るか。捌の方や他の連衆の方が気を使って下さることが、却って本人には重荷となる。それが目下の最大の悩みである。

私のつれ合いの友人で、ここ十年ほど連句に凝っている男がいる。たまに誘いが来ることもある。つれ合いは「俺の柄じゃない」と乗らず、私も俳句と連句の区別もつかない人間なので、専らハイキングや飲み会の方だけ、つき合ってきた。十人ほどの夫婦共遊びで、年に数回、温泉やカラオケに興じている。

昨年春、悪性の風邪で寝込んだ。たまたま件の友人から電話があり、気弱になっていた私は「おとなしく俳句でもやるうかしら」と口をすべらせてしまった。「俳句じゃない、連句ですよ。本を送りますから読んで下さい」しまったと思ったが遅い。数日後、「貴婦

勉学の志、まことに慶ばしき限り・」の言葉と共に、『芭蕉七部集』や『去来抄』などが届き、中に東明雅著『連句入門』が入っていた。彼は十年前、単身赴任で地方にいた時この一冊に巡り会い、以来この書を師として連句を学んできたという。だが私にはそんな器用な真似はできない。あれこれ探してのA・C・Cに連句の教室があることを知った。しかも、あの明雅先生が講師というではないか。

受講生となって半年、まだ連句の何たるかも分らない。諸先輩の顔が鬼に見えたら、座の途中で逃げだしたくなることもある。だが、友人の手前、意地でも止められないのである。

俳句をやってみれば等しく蕉翁に至り、翁を学べば勢い俳諧に出会う訳ですが、何分これが頗る難解、まるで希臘・羅句の韻文を読まんとするもかくやの有様の一方、書肆には現代高名の文士・詩人による「・・・歌仙」の類が積まれ、連句ほど面白い物はないぞと囁いてくれます。然らば、世にめずらしきこの文芸を味読出来ぬとあっては日本人として口惜しき限りとばかり、まずは東先生著『連句入門』『芭蕉の恋句』等を繙きました。言うなれば置水練、百聞一見にしかずと悟って、昨年四月から本講座の末席を穢すことと相成りました。

さて教室では当分東先生の講義拝聴が続くならんと思いきや、忽ち連衆として歌仙の付句に苦吟を強いられたではありませんか。何事も習うより慣れる、とは申せ正直これには仰天、端無くも餓鬼大将に容赦なく海へ投げ込まれ、ベソ掻きながら泳ぎを覚えた幼児体験が蘇った程でした。ここでは然し、先生初め諸先輩、とりわけ故杉亭氏の手取り足取りの行届いた介助を戴きました。

あれから一年、お蔭様で、位高くも変幻自在な連句という麗人の姿を、臙げながらも窺うことができた喜びを実感しております。有難うございました。

第五十二回猫養会例会作品

(平成七年一月十八日 於 江東区芭蕉記念館)

歌仙 初懐紙 東 明雅 捌

先がけて梅一輪や初懐紙

明雅

宝ぶくろに大福の席

芙紗

雪しろのいっきに海をめざすらむ

志乃

鯨の群れに網をひく人

守英

春の月遠く聞こゆる子守唄

ますみ

申こんにやくに辛子たっぷり

泉子

なにはさてくもってしまふ眼鏡ふく

紗

若隠居さん風呂が道楽

英

毎晩のセーラームーン夢世界

紗

買って買ってと腕を取らるる

乃

めんごいなおしょうしなとはどこの産

同

行く先きめず逃避行とか

泉

業平忌むかし男になりはてて

み

夏大根の畑照らす月

英

羊飼ひ長編小説脱稿し

同

食事の前の軽いジョギング

乃

花びらのちるちるフレックスタイム制

紗

春はいはざるみざるきかざる

英

受難節深く懺悔の頭垂れ

み

携帯電話こんなところで

同

鬼女の面ひらあやまりの楽屋裏

乃

あなた命に皺の波よる

み

紅の濃きハイミスひとりもてあまし

泉

大臣の座のまたも逃げゆく

乃

風牙ゆる海底火山動くらん

英

不意に飛び出すへつつひの猫

み

洗濯機バリの路地に据えつけて

英

返事無用と病氣お見舞

み

額縁のやうな窓から寝待月

泉

鳥頭つむ仙丈の嶽

紗

半世紀うそ寒の身をかこちつつ

同

モンテクリストのこる名作

泉

台本にないことやれば流行る芸

乃

飲まし飲ましと酒をつぐなり

紗

小彼岸の桜はいまや花ざかり

雅

ちいとばあとがゆるするブランコ

泉

連衆 根津芙紗 宮内志乃 水鳥ますみ

野崎守英 青木泉子

歌仙 年明くや 内田麻子 捌

年明くやひとりの庭に鳥の影

麻子

若水汲みし桶のさざなみ

清子

ハーモニー合せ歌ふ子春めきて

治子

たんぼの絵の並ぶ教室

淑代

羊刈る丘の牧場に月昇る

紀子

葉巻くゆらせ醒ますほろ酔ひ

政治

蝶ネクタイ髭のホストは父に似て

志

あの娘が神に見えるこの夜

清

抱きたいとうまく言へない韓国語

代

実梅のかたく瓶に沈める

紀

主義主張合はず新党また生れ

投網でとらふ鼻曲り鮭

縄文の住居発掘鎌の月

代

ベカンベ祭りオカリナを聞く

紀

検診の肌にはやりと聴診器

治

たしかめないで溜る釣銭

志

黒髪しぼりに染めて花の散る

代

業平覬太るこの頃

紀

ふらここを天に届けと漕ぎ上げて

清

大リーガーへの夢は叶ふか

代

シャツの胸ミッキーマウスでVサイン

紀

お下げ髪して囲ひ者なり

同

後朝に漢方十薬匂はせる

志

ポケットベルの寒き呼び出し

治

軍隊とふ受難のありし青年期

同

よろけ縞着る園の縞馬

清

琴比羅の歌舞伎升席下足付

紀

窓の夕日がさつとまぶしく

同

桂男はシルバークレイの紳士なる

志

湿地茸・平茸村の産物

清

常ならむ有為の奥山蝮蛇の鳴き

代

国家試験を軽くパスして

紀

口笛の上手い子下手の子ひとしきり

治

競輪新聞丸め小脇に

代

伊豆の島花ちりばめて濃く淡く

麻

とも綱を解くうらかな浜

志

連衆 下鉢清子 加藤治子 浅賀淑代

椿 紀子 峯田政志

歌仙 小正月 副島久美子 捌

小正月女人ばかりの膝送り 久美子  
 繭玉飾り華やける床 道子  
 海苔粗朶の並びし浜辺船出して 八重子  
 遠のく山は笑ふかに見ゆ 水壺  
 ピクニック帽子お揃ひ昼の月 一恵  
 ミネラルウォーターラベルノングス利子  
 神父より受けし聖餐おごそかに 恵  
 嘘と実とが緋い交ぜの彼 道  
 相性を決めるコインの裏表 重  
 駅の広場にサルビアの鉢 道  
 幾万の身に降りかかる震度7 恵  
 真夜中の月暫し佇む 恵  
 茸狩去年の在処地図に丸 利  
 爺が秘蔵のどぶろくの甕 壺  
 縁側に転がるカメラ「写るんです」 利  
 手招きしぐさ猫はお上手 美  
 花衣清し御苑の園遊会 道  
 春暖の候便りしたため 利  
 町中に蜜蜂飼へる男ゐて 恵  
 闇笛ひそと夜の静寂に 重  
 蛇行して遠き小川の水烟る 恵  
 山海関は旅のスタート 利  
 項羽偲ぶ虜や汝を如何せん 壺  
 菊の香りの長枕して 利  
 月影を浴びつつ炎えし更年期 重  
 マロングラッセ甘味しっとり 道  
 新会派離党すすめる社会党 利

てきばき事を運ぶ葬儀屋  
 マジシャンの箱よりパッと白き鳩  
 丘に登ればユトリロがある

代々の老舗が誇る鮎料理  
 外寝労働者大尽の夢  
 ヤング棋士駒音さゆる竜王戦  
 パソコン通信増やす友達  
 お目細き半跏思惟像花静か  
 のどかに暮るる畑中の道

連衆 加藤道子 山崎一恵 本田八重子  
 武村 利子 今宮水壺

歌仙 唐ぼたん 杉内徒司 捌  
 唐ぼたん新年淡き紅ほどく 孝子  
 初松籟の吹きぬくる苑 央子  
 春スキー戻りたる子の歌ひゐて 冬乃  
 門の小川に雛を流しぬ 啓世  
 仮名文字の句碑よみがたき朧月 徒司  
 仲間さそって皇居一周 守男  
 弁当をあげればガリの酔の香立つ 乃  
 心のうちは今日は言へずに 孝  
 目が合ひてしどろもどろとなりにつけり 啓  
 警察犬のいかい大きさ 乃  
 雷神の風土記の丘を駆け廻る 孝  
 滝見上ぐれば薄き昼月 央

カメオ売る男うるさくつきまとひ  
 シルバーツアーまたも休憩

高速路ねこそぎとなる地震の後  
 長明ならば如何に記さん  
 曰く「落花は枝に還らず」と  
 旬の目刺に人肌の酒  
 永き日の愁ひを癒す漫画本  
 修那羅峠に石佛をみる  
 脱ぐ時はくりりと背を向けモデル  
 「写るんです」で写す嬢ちゃん  
 「赤い鳥」武井武雄のなつかしや  
 残る蛍の迷ふ草むら

棒状にタオルが冷えて湯屋の月  
 杉玉かけて酒祝する  
 取材陣手負ひの猪を取巻きて  
 緊張はしるその顔に惚れ  
 名女優「金色夜叉」の日に葬儀  
 塔遥かなり雪にかすれる  
 明太魚ゴム手袋でまぶす醬  
 ディスクジョッキー相槌をうち  
 4WD磨きに磨く定年後  
 お茶のむ媪猫をふところ  
 花筏堰の丸石すべりゆく  
 人影もなく揺れるブランコ

連衆 中島啓世 坂本孝子 遠藤央子  
 百武冬乃 近藤守男

守 同 央 同 乃 孝 乃 司 孝 乃 啓 守 孝 啓 乃 孝 啓 同 孝 司 央 孝 乃 啓

歌仙 初富士 金久保淑子 捌

初富士やみはるかす海ひた凧ぬ

大漁旗と注連飾る船

猫柳ミモザもそへて届くらん

利茶ふつくり友と味はふ

朧月書架に並びし稀観本

パソコン連句イラストも入れ

ききすぎし糊ごはごはと宿浴衣

麦酒を注いでまづは乾杯

ときめきの小さき鼓動のつたはりて

ライマブレスを嵌めた太腕

政見はなくても土下座で当選し

地震ひと揺れ神社べしゃんこ

萩の声昔の栄華いまは夢

捧ぐ兜に斜めなる月

種もたぬ庄内柿を干し上げて

そっと叩いて眠らせる嬰

チーズして記念撮影花の下

吉祥天の開帳に合ひ

孕鹿うるみたる目にみられ居り

移動トイレに長い行列

小太りのグルメツァーがのし歩く

一夜で仕上ぐ香港の服

鴛鴦の思ひ羽立てて水尾を引き

寒弾きの女われを誘ふか

ペットから落とす枕のねじまがり

香のよきシャボンバーゲンで買ふ

口癖は二度の童となるまじく

婿に譲らぬ家督実印  
魯山人藍の大皿月照らす

誰か来るらしちる鳴き止む

秋深む身障の子と受く栄誉

眼鏡のくもり丹念に拭く

鯉の池茶屋にくゆらす巻き煙草

縞模様立つ雨の庭石

咲き満ちて花散らすらん紅しだけ

スケートボード子等ののどらか

連衆 上月淳子 中川哲 倉本路子

八角澄子 八代婿

歌仙 初詣

豊田好敏

捌

川を背の翁稻荷へ初詣

淑気ただよふ拍手の音

兄弟風の糸張る縁先に

みつばの香る朱の汁椀

春惜しむ礁を洗ふ浜の月

帽子斜めにジョギングのひと

書道展亥の字さまま五六十

一途なる恋故郷を捨つ

落魄の門付けなれど愛の巢を

秋の祭りのはやし流るる

夢の月バベルの塔に懸かりゐて

手土産にするマロングラッセ

ひとの寄りひとの散り行く繁華街

鳩の餌売り無病息災

東京の真っ直中の廃校舎

ワープロ叩く締切の夜

遠花火見つつ手元はおろそかに

男冥利は友とどびろく

峡の湯に猿百匹の群れ遊ぶ

蕪村洒脱に描く一幅

淡路島寝覚めに襲ふ大地震

シャッターチャンス生きた新聞

雪女郎うしろ姿のなまめかし

みんな食べさすき焼きの肉

何事もなかったやうに妻帰る

発表会でピアノ弾く孫

甲虫くわがた大事に飼はれるて

遺書に記さる高麗の壺

東山借景にして月の寺

豊年なれど相場安定

菊の酒座をふくいくと取り仕切り

カリヨン時計飽かず眺むる

「オッペルと象」の売れてる古本屋

新入学生親が付き添ふ

助六の見得も決まりて花吹雪

木の風車回る門柱

連衆 東郁子 権頭和弥 五味蓉子

若尾よしえ 若松香

郁

え

弥

香

同

弥

郁

香

弥

蓉

香

蓉

弥

え

郁

敏

郁

香

蓉

香

弥

蓉

敏

蓉

歌仙 時雨忌 篠原達子 捌

一札を蛙石にも初懐紙 達子

雀ついでむ福藁の上 瑞枝

波の音風のうなりとまじりて 健悟

ジョギングの人つづく浅春 寿子

月まどかのどかに絵筆つかふ子の 碧

みんなに配る豆の大福 悟

鈍行の旅の出会いを楽しみに 壽

二重險の仏愛らし 悟

姫君の閨には甘き蚊遣香 枝

淫らな血筋秘めし教養 寿

ワープロの折れ線グラフ作り変へ 枝

センサーで出る手洗ひの水 碧

濡れぬれと黒き甍を照らす月 枝

行者踏み消す火祭のあと 悟

張り住む母に秋味とって置き 枝

大壺に投入れの花ポロネーズ 悟

談論風発暮れなづむまで 枝

鬪鶏を目玉にせんと村おこし 悟

よい値で売れる古い看板 碧

突然に襲った地震直下型 枝

メビウスの輪をばっさりと断つ 壽

四温晴れ趣味の畑にはげむひと 碧

綿入れ襦袢ちゃんちゃんこ着て 悟

待ちに待つ文芸賞の発表日 碧

フォーカスされた極秘結婚 寿

妬心にて尿毒症といふことも 悟

ぬらりひよん来て呵々と笑ひぬ 壽

やや寒の化粧を落とす楽屋風呂 枝

ワイングラスに月をころがし 悟

チップ積み夜長の卓のルーレット 枝

ひいき球団またも気にする 碧

先生は伸ばしはじめた髭を撫で 悟

マーブルの上叩くパイ種 碧

花盛り旧道歩く箱根山 達

風車ゆるやか陽炎の中 碧

連衆 大窪瑞枝 吉村ゑみこ 杉山壽子

松本碧 佛淵健悟

歌仙 初懐紙 橘文子 捌

初懐紙橋二つ越え来たりけり 文子

鳥総の松の挿さる木戸口 和子

うぐひすの鳴き声真似る児等のゐて 啓子

パッチワークできしゃご入れ縫ふ八千代 碧

弥生尽月に墨の香漂ひぬ 寿

駅売り新聞全部買ふ人 和

震度七阪神市街すたずたに 代

制服姿頼もしく見え 啓

昼寝覚めもう髭の濃き頬を寄せ 和

尼となりしを悔む祇園会 代

濤の音くり返しつつ太古より 同

屁こき虫にも五分の魂 同

綱打ちのよいやよいやと月の宴 和

毒茸捌く包丁の冴え 代

掌の長命銃線を自慢して 代

年子の姉を呼び捨てにする 代

花の雨能楽堂にたたむ傘 代

仔猫ひっそり階段の下 代

プロバンスワイン注ぎ合ふ春の旅 和

甲冑つけし幽霊に逢ひ 代

超能力数値で測る研究者 啓

将棋名人うちのボクちゃん 代

枯木にも枯木の情趣絵筆執り 紅

思い切ったる身に疼く風 和

むち打ちに耐へて女の恨み節 文

若き男を呼びしフェロモン 和

どんどんおまへ寝てるか生きてるか 和

錆びし起重機工場の月 啓

定食の丼飯に鯨揚げて 啓

菊人形に鬼平の貌 和

世の為になるか政党分裂し 和

箱を開けば箱が出てくる 啓

広告の裏も広告目を皿に 代

種も仕掛けもマジシャンの芸 代

この道のいよよ厳しく花の奥 代

遠霞せし山の頂 紅

連衆 式田和子岩井啓子 齊藤八千代

中村ふみ 船本志紅



襖バサリ裂けシ炎暑や天の声 天留子

米寿とはとも思えない力強い特別作品

「天の聲」二十五句を、俳誌「寒雷」二月号で拝見したばかりでしたので、突然の訃報に本当にびっくり致しました。

天留子様とは、昭和四十九年新宿に新設された朝日カルチャーセンターで御一緒に以ての俳句のおつきあいでした。東京女高師を出られただけあって、あの年代には珍しくしっかりと御自分の考えを持っていらして、はっきりと表現出来る方だと尊敬申し上げておりました。昭和五十六年より、明雅先生に師事されて連句を楽しんでいらしたと伺っています。平成に入った頃から御病気がちでしたので、ずっと後輩の私は御一緒にさせて頂く機会がなく残念に思っております。

五十一年に四人のお子様の末の泉様を白血病で亡くされたことは、慟哭などではとても償えない大痛恨時であったと察せられます。

再入院と題された御句の、

芒ただ走り流れて救急車 天留子

は私の心に深くインプットされている句のひとつになりました。今頃は泉様や、御一緒に楽しまれた杉亭様・隆秀様方と天国での賑やかな座が持たれていることでしょう。

御冥福を心よりお祈り申し上げます 合掌

連句の付けあいでは、打越句(前々句)から転じているかどうかがとても大事なポイントである。それは打越句に通うような趣向素材をもってきてはいけないということである。しかし、このことを言葉として知っていても、一つの付けをめぐって、ある人は転じがないといい、ある人は構わないという、そういうことはしばしば起きる。

このギャップは、「打越感」がいわゆる伝統的な本意本情に即して把握されている側面と、特殊個人的な基準にもとづいている側面との、両方にまたがって揺れていることからくるのではないだろうか。

このことを今、精神分析学に準じてそれぞれ「象徴」と「自由連想」と言ってみると、すつきりするような気がする。

たとえば次のような付けあいがある。

A ふるさとの納屋に眠れるオートバイ

B ○○○○○○○○○○○○○○○○○

C 犬の仔の生まれたという知らせ来て

この付け句(C)は、取りあえず打越(A)に似たところがあるとは思えない(どっちも走るものだけ)。だがこれを鑑賞する人が、

オートバイで犬とぶつかった経験の持ち主だったとしたらどうか。

「オートバイ」―「犬」につよい結びつきができて、その人にはとても気になる打越と感じられる。付けあいのプロセスでこんな個人的な文脈(自由連想)はどのように処理されているのだろうか。

打越の見えない力は付け句に響いている。その時の自由度は、「象徴」―「自由連想」―「捌き」でできる三角形の内側に閉じこめられておもうので、それぞれの関わりに興味に向くのである。

捌きは、完全な受容とまではいかななくても、連衆の自由連想的こだわりにあとうかぎり応えようとするだろう。でない連衆は、「こうであるところ」においてでなく、「こうあるべきところ」(たてまえ)に自分の気持ちに寄せていくように思う。「自発性」こそ協働の創作の鍵であるとするなら、この流れはちょっとこまる。

”打越感”ということ、大昔に連句を染しんだ人たちは、転じ(の基準)や去嫌いが確立されるまでは自由連想的忌避を際限なく申し立てていたのだろうか。ここらに来ると、言葉の食い合わせのような発見が打って一丸となっていく(式目化へと)歴史が夢想されて楽しい。現代人の嗜好は転じの基準に、そしてまた一巻の印象にも大きく作用していくものだという感じがする。

二五四三と、空拍について

林 宗海

先頃、佛淵健悟氏がパソコン通信のPC-

VAN連句ひろばにメッセージを寄せられ、

A なんじゃもんじゃの木の芽ぶきををり

という短句について「木の／芽ぶきををり」の

調子が非常に気になるがその理由を理論的に

説明できないものかという問題提起をされました。その折にいささか考えるところがあり

ましたので、ここに再録させて頂きます。

問題のA句の下七は短句に好ましくないと

される「二五四三」の「二五」にあたる形でも

あります。このことが「気になる調子」と

関連しているのは明らかでしょう。そこで

試験的にこの句に手を加え、次のような三つの

異形を作ってみました。

B なんじゃもんじゃの木の芽ぶきををり

C なんじゃもんじゃの芽ぶきたる木よ

D なんじゃもんじゃのふきたる木の芽

これらは言うまでもなく、三四(B)、五二

(C)、四三(D)の形にあたります。

さて、上下各七音節構成の短句は声調の上

から見れば四拍から成る小節を四つ連ねた歌

曲になぞらえられますが、上下各二小節(八

拍)にそれぞれ七音節分の歌詞を配置しよう

とすれば、必ず、空拍が上下に一つずつ置

かれなければなりません。そこで右の四異形

の後半二小節についてそれぞれのリズムの運びが歌詞とどのように対応するかを観察してみよう(●は空拍の位置、一線は文節の切れ目を示す)。

A 木のー芽ぶきーをり

○○○○●○○○

B 木のー芽ーふきーをり

○○○○●○○○

C 芽ぶきーたるー木よ

○○○○●○○○

D ぶきーたるー木のー芽

○○○○●○○○

右によれば、A句ではリズムの運びが「芽

ぶき」という単語を分断している状況が伺わ

れます。さらにそれぞれの空拍の位置に注意

してみると、B(三四)とC(五二)では空

拍が全音列の途中で置かれて適度な休止状態

を作っているのに対してA(二五)とD(四

三)においては空拍がなかなか現れないこと

が看取されます。特にDの四三は、音列の終

りによくやく空拍が現れる点が特徴的です。

すなわちこの空拍が適度の位置に現れないと

いう点が二五四三の特徴であると認められま

す。五二は良くて二五がいけないということ

も、このように把握すれば納得がゆくのでは

ないかと考えます。

先人が二五四三を短句に避けるべき形とし

たのは、このあたりの事情を体験的に把握し

た結果によるものだったのでしよう。

連句と酒 \*

「茶筌酒」

中川 哲

天神様を主人公にしたご存じ「菅原伝授手習鑑」の三段目佐田村(桜丸切腹の段として知られる)の冒頭の件りが私は好きだ。道真公の恩義を深く感じてゐる白太夫(梅王、松王、桜丸といふ三つ子の親)が七十の「賀の祝」(古希)に近所への身祝ひにと、小さい餅を七つ宛配る。餅を担いだ隣の十作が礼がてら訪ねてきて、「酒の振舞ひを受けなくては祝ひにならない」と催促する。「道真公配流への遠慮もあり、さっきの餅に茶筌で酒を振りかけてをいたから二度の祝ひも済んだのだ」と笑ひ合ふ。まことに牧歌的な春先の農村小景である。

「聞きもならはぬ茶筌酒」といふ義太夫の節付けも絶妙で、楽しい場面なのだが、いまの歌舞伎ではカットされて見ることができない。遣句のない歌仙みたいになってしまった。

猶養会案内

○ 次の方々の立机式が開かれます。ふるってご参加ください。

梓庵 哲 (中川 哲)

一穂庵 啓世 (中島 啓世)

涼月庵あかり (中田あかり)

房連庵 麻子 (内田 麻子)

緑華亭 孝子 (坂本 孝子)

梅香庵久美子 (副島久美子)

久慈庵 弘子 (一野沢弘子)

日時 平成七年五月十七日 正午開会六時迄  
場所 江東区深川芭蕉記念館  
会費 五千円

(ご出欠は五月二日まで)

事務局 豊田 好敏

〒一四一 品川区東五反田三・一・一  
TEL 03-3441-9771

○ 『猫養作品集V』出来上がりしました。  
よろしくお願いたします。バックナンバー  
残部あります。

〒二七七 柏市加賀二・十二・十一

TEL 0471-72-8119

梅田 利子宛

荒川 爛柯人

杉内 徒司

新聞で荒川爛柯人(政司)の訃を知る。

「二月七日急性肺炎のため死去。八三歳」

爛柯人に最初に会ったのは昭和四三年九月

十七日。次いで翌年の四月五日、玉川河畔の

土筆亭で歌仙一巻のお手合せをした折、三井

武翁門の私の兄弟子とわかる。

その頃信州へ『俳傑白雄』を注文した処、

徒子と名乗っていた私を女性と間違えて、著

者の西沢茂二郎氏から「御夫人で俳諧に御嗜

みの御様子・・・」の手紙を頂戴したことが

あった。それを爛柯人に話すと、そんなら僕

の政司の司を使わないか、などというやりと

りがあった。改めた徒司という俳号を何十年

も使っているのも因縁というものであろう

爛柯人は昭和十年東大時代は碁に凝ってい

たが(このため俳号を爛柯人としたという)、

同じく東大国文学科で、俳文学を専攻してい

た府中三中の同級生渡辺益雄、宮本三郎の二

氏にさそわれ歌仙五巻を満尾、式目を身につ

けたという。二人の外、広島高校で一緒の大

谷篤蔵とは生涯親しくしていた。

爛柯人は十一年東京瓦斯電気工業に勤める

と、連句会をつくり、戦後瓦斯電が日野自動

車に変わった後も四十九年まで続けたという。

彼が再び本格的な連句修業を始めたのは三

井武翁との出会いがきっかけ。その説明には  
彼の随筆集『寒椿』一節を記してみよう。

例によって角力見物(昭和三九年初場所)

の帰り、両国の料亭で一献酌み交していたと

き、三井武夫さんが手許の白紙にさらさらと

初場所や力漲る大角力

と書いて私に渡された。

酒間の興であらう。そこで私も

紫電一閃上手出投

と書き添えてみた。三井さんこれをちらり

と見て「ちょっと付きすぎですなえ」と云わ

れる。「付きすぎ」とは連句特有の言葉。

さてはと、

荒川「三井さん連句をなさるんですか」

三井「ええやっています」

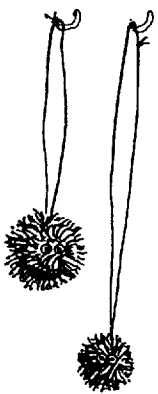
このやりとりが私との連句事始めとなつた

のだ。

爾来四年有余、三井さんの思わざる死に至

るまで文音連句を巻くこと十六巻に及ぶ。

(荒川政司『寒椿』平成元年一月刊)



【Q】 時事の句ということが言われますが、連句一巻の中でのこのような付句の意義、又どのようなことに気を付けて考えればいいのかをお教えください。

【A】 近世の俳諧には時事の句というものは無い。戦前の連句にもすくなかったようである。『俳諧独稽古』（一八二八成）には、作品中に詠んではならないものを列挙して、慎めよ怪異乱世に火事罪科天災不順不孝不忠義  
近代の貴人の御名官名も夫と知れるは句の上に忌  
四民とも今居る人の名を出さず家々の秘事  
我家の業

とあるが、こんな遠慮がゆるんだのは、戦後の民衆の意識の変化によるものであろう。

近世においては、時の政治、世情を批判することは許されなかった。これを犯したものが筆禍に遭った例は枚挙に遑がない。近代になっても、その名残があって、それが全く払拭されたのは、戦後天皇が人間であることを宣言されて以後のことであろう。俳諧と連句の違いがはっきりとするところである。

だから時事の句が現代連句に詠まれるという事は、昔の俳諧には欠けていた素材の一つが復活したことを通して、現代の連句がよ

り自由になり、漸く近代的になったことの一つの証拠であろう。

また、時事の句は、その存在によって、一座が興行された時代、あるいは年次までもその作品の中に残すことになる。これは一座の人の連衆心を強めるものであるうし、また、その作品を鑑賞する人に取っても、何よりの手がかりになるところであろう。

ただ、それだけに、たとえば、歌仙一巻の中に時事の句が三つも四つも入ってくるため、電車の中で週刊誌の中吊り広告を読んでいるような、おぞましい感じを否定できない。それは一句の中に作者の感情がこもる余白がなく、生硬でこなれていない句が多いからであろう。

さらに言えば、時事の句として一巻の中に取り上げる題材は、十年経っても二十年経っても、世人から忘れられないようなものであって欲しい。一・二年ですっかり忘れられるようなものは連衆の共感もすくないであろうし、鑑賞する側にとっても迷惑である。

私は時事の句を必ず一巻に一つ読めと言っているわけではない。前句に即した時事の句が出たら出してもよいというわけで、わざわざ時事の句を出す為に苦勞をすることは無いと思う。また、時事の句はやはり歌仙一巻に一つ、あるいはそれに関連して出してせいぜい二句ぐらいで止めるようにしたいと思う。

◇ 猫養発展基金にご協力有難うございます。  
一万円 道井幸夫 下坂元子 神谷安子  
八千円 諏訪欣二

(敬称略)

◇ 基金の口座 富士銀行新宿西口支店  
普通3376045 猫養基金

— s — s —  
あとがき

○ 阪神大震災、地下鉄サリン事件、オウム真理教関連事件と、たてつづけに大きな事件が起きた。今年はせつかくの花の季節もぼんやり打ち過ぎてしまった感じ。屈託があっては詩心は萎える。ほかからか、爽やかな風が吹く季節になって欲しい。

○ しばらく静養されていた秋元正江先生が又A・C・Cで発句の指導をされる。こちらは嬉しいニュースです。

季刊「ねこみの通信」第十九号

発行者 猫養連句会

発行所 柏市つくしが丘二・二・十二

東明雅 方

印刷所 アトリエ・Neko